

第2節 大学祭合唱・学科卒業式など

毎年3月20日、広島文教女子大学では、学位記授与式が行われる。学生たちはこの日を以って4年間の学生生活を終え、社会人として巣立っていく。荘厳かつ厳粛な式を終え、華やかな式服に身を包んだ学生たちは、それぞれの学科ごとの卒業式に臨む。

初等教育学科では、学生たちが、約1年前から自らの手で準備してきた、学科卒業式を行う。会場となる大講義室には、卒業生、保護者、教員はもちろん、次年度自分たちの学科卒業式を考えて出席している3年生の姿も見える。

初等教育学科卒業式が始まった。振袖、袴姿、スーツ、と一番の正装に身を



2009年3月20日初等教育学科25期生卒業式

包んだ学生が、一人ひとり名前を呼ばれ、胸を張り、学科長から卒業証書を受け取る。その姿は、誇らしく、すでに社会人としての自覚と自信を持っているように見える。百余名の卒業生を送り出す学科長も感慨深い思いを述べられた。続いて入学時からのチューターが一言ずつ思いを述べる。学生の中には、目を閉じて4年間を振り返る者、思い余って涙でうつむく者、それぞれが4年間を思うひとときとなる。続いて4年間のさまざまな行事の思い出がDVDで映し出され、懐かしい画像に笑いがこぼれる。一人ひとりが、この学科卒業式を特別なセレモニーとして臨み、大切な時間として過ごし、友と別れ、そして社会へと巣立っていく。

2009年4月、新しい年度が始まった。4年生26期生のチューターガイダンスに参加させていただいた。チューターからの連絡の後、何人かの学生が自発的に挙手し、他の学生へさまざまな連絡をしていた。その中に、大学祭で行う合唱、学科卒業式に関するものがあった。今回は、その合唱への取り組みと、卒業へ向かって歩む学生の姿について、振り返って述べる。

大学祭合唱は、初等教育学科恒例の行事である。私が赴任した年に初めて見たとき、4年生が多く参加していることに驚いたが、この合唱が初等教育学科の伝統として、長い間続けられてきたことに、さらに驚いた。

今年度の4年生(26期生)の話に戻る。彼女たちは3年生の段階で、先輩の

学科卒業式に参加し、その直後から動きを開始した。とりわけ児童教育コース音楽専修ゼミ（以下音専）、幼児教育コース音楽ゼミ（以下音ゼミ）を中心とした学生が、半年以上先の大学祭合唱のために活動を開始したのである。4年前期は、6月に予定されている最後の幼稚園実習や、7月に行われる教員採用試験の準備で忙しくなることが予想されたため、早目に動きはじめたようである。

以下、主な動きを、列挙していくことにする。

3月	卒業式後、音専・音ゼミで話し合い、各ゼミへ歌いたい曲を2～3曲出して欲しいと連絡。
4月	曲が決定（「手紙」「友だちのうた」「ベストフレンド」）。音専・音ゼミで曲を分担して、楽譜探し。伴奏者決定。
5月	楽譜印刷、各ゼミへ配付。
6月	教員への参加依頼（プリントを作成して配付）。授業や実習、教採対策のため、全員での練習日が取れない。伴奏入りデモCDを作成し、各ゼミへ配付する。
7月	指揮者を募集。 はじめての練習。全員の練習と併せて、児教・心理・幼教それぞれで音取り。
8・9月	練習。教員へ練習日予定表を配付。
10月	練習再開。
10/2（金）	2コマ目。
10/5（月）	3コマ目、体育館リハーサル。
10/6（火）	5コマ目。
10/7（水）	4コマ目。
10/8（木）	2コマ目、（児教・心理）。3コマ目、（幼教）。 5コマ目、グラウンドにおいて、舞台リハーサル（全員プラス教員）。
10/9（金）	予備日。
10/11（日）	本番。

後期授業開始2日目の10月2日（金）2コマ目。今日は後期になって初めての練習であることを聞いた。音楽棟に歌声が響いてきた。器楽室へ行くと、パートごとの練習、全体練習と、スケジュールが板書されていたが、何より驚いたのは、70余名の学生が参加していたことである。教室の机や椅子を移動してスペースを作り、立ち位置や並び方、振り付けなども学生たちが全員積極的に話し合って動いている。有志が申し出て、当日の服装について考えたり、曲中でのせりふを相談したりすることになった。また、26期生のシンボル“ほし”をどうアピールするかについては、全員で考えていこうということになった。音専や音ゼミの学生にすべてを任せるのではなく、4年生全員が、参加者の一人として関わっている様子が伝わってきた。4年次になり、授業がない日であっても、毎日の自主練習に、何十人も学生が参加している。10月学科会するとき、教員へは、改めて学生から直接参加依頼があった。当日は、教育懇談会個人懇談と時間が重なり、参加が危ぶまれたが、9名の教員が、楽譜を見ながら、首をかしげながらではあったが、学生と共に声を出すことができた。チューターは、直前まで学生とのやりとりがあり、指揮棒を振り、ナレーションとのタイミングの練習を行い、学生がつきさりで支援していた。また学生は、全員がピンクのTシャツ、イメージ・シンボルである金色の星を胸につけ、舞台上上がった。歌いながら、せりふを聞きながら、4年間のさまざまなことを思い出し、あちこちから鼻をすすりながら、一生懸命歌う声が大ホールに響いた。

大学祭後、学生に話を聞いた。



2009年大学祭初等教育学科4年合唱

「毎年舞台で誇らしく、涙して合唱する先輩の姿を見てきた。先輩ってすごい。次は自分たちの番である。このことを最初に思ったのは、1年次の大学祭だったかもしれない。このときこそ、4年生が団結し、先生や友達への感謝を伝える場だと思う。合唱を、みんなですることができた。ありがとう。みんなが一つになることができた。そしてこのすばらしい伝統を後輩へ伝えたい。」

「大きな一つの行事を行うには、一人ではできない。たいへんそうだ、と気づくこと。自分なら今何ができるか、と考えること。そっと手をさしのべること。一人で生きているのではなく、友だちに支えられているから。そして自分にできることで、友だちを支える。」

「文教に来てよかった。みんなに出会えてよかった。」

私は、これらの言葉を聞いて、「すばらしい伝統が受け継がれている、そして、きっと来年もこのすばらしい初教の合唱が響きわたるだろう。」との思いを強くした。

大学祭が終わった。学生たちの“次”は、「卒業」である。自分たちの巣立ちの日をどのように計画し、迎えるか、である。

卒業行事に携わるメンバーを「グラスタ」と呼ぶ。「グラスタ」とはグラジュエーション・スタッフの略である。グラスタメンバーであることに誇りを持っている学生がいる。

今回話を聞いたところ、このグラスタメンバーは、4つのグループに分かれて活動していることが分かった。学科卒業式係、卒業パーティ係、卒業DVD係、卒業文集係の4つである。学生は、チューターとの相談の上、4月のチューターガイダンスにおいて、それぞれの係の希望者を募集することを伝えていた。多くの学生が、何らかの形で、グラスタメンバーになりたいと希望していた。メンバーは、6月にはじめての集まりを持った。各グループ6ないし7名のスタッフで構成され、全体をまとめるリーダーが3名、合計30名くらいの学生が、自分たちの卒業に向けて、動くことになった。

学科卒業式メンバーは7名。残されている昨年の先輩からの資料を頼りに、行動を開始した。先輩からの資料は、卒業式プログラム・リハーサルプログラム・席順・ノートなどで、昨年だけでなく、2年前のものも残されている。し

かし、今年は先輩とは一味違った卒業式にしたいと、メンバーが集まり、話を進めている。今後は、式次第の決定をはじめ、教員へ招待状を送るリストを作成したり、式中で歌ううた、そのバックに流すスライド作成のため、ゼミや行事の写真を集めたりしている様子である。

DVD メンバーは、ゼミごとや、教員への撮影予約をし、カメラを持ってゼミや教員の研究室を回っている。すべての撮影が終了した後、DVD の編集に取り掛かる。できあがったDVD は、コピーされ、学科卒業式に学生全員、教員へ配られる。

文集メンバーは、趣向を凝らした学生のアンケートや、一人ひとりの思い出、学長はじめ、お世話になった教員（非常勤講師を含む）からも原稿をもらい、編集し、製本して、学科卒業式に配付する。

パーティメンバーは、卒業式の夜行われる「卒業記念パーティ」を仕切る。会場の決定から、参加者の決定（学生は出欠を取り、教員へは招待状を配付、非常勤講師は郵送）、食事のメニュー、当日のプログラム等すべてを任されている。学科卒業式とは違った、リラックスムードのパーティで、学生たちは自分の過ごした4年間を思い出し、最後のひとときを、教員や友人と過ごす。この熱い思い出を胸に、次の日、故郷や新しい赴任地へと散っていくのである。



2009年度初等教育学科グラスタメンバー

4つのグループをまとめるリーダーたちは、各グループがいつ、何をしているのかが分かるよう、カレンダーに書き込んだ日程と内容を把握しながら、各グループにメールを送ったり、連絡を受けたりしている。また、大学全体の卒業アルバム委員として、学生の写真撮影や、アルバムの構成、写真屋さんとの

交渉なども行っている。

決してすべてのことがスムーズに進んでいる訳ではない。ゼミごとに全員揃ってのDVD撮影を試みるが、就職活動や、何らかの理由で揃わない。そのまま決行するのではなく、休みがちな友人にメールを送ったり、電話をかけたりにして、声をかけ、心配してアパートへ行ってみる学生の姿が見える。一緒に歩んできた証として、全員揃うことにこだわる。

「将来学級を持ったら、子どもたちとしっかり向き合いたい。友だちを支えることで、これからの練習と考えています。」

「一人の大きさが大きい。一人休んでも何かへん。そして寂しい。みんな揃って、一緒に歩くんです。」

学生の声に象徴されるように、一人の存在感が大きい。一人が集まって集団ができる。支え、支えられ、自分が大きく成長していることに、後になって気づく。

また、ゼミやグループ内において、意見が対立することがある。集団討論やロールプレイ、グループワークなどで、気持ちを話したり、他人の意見を聞いたりすることを学んでいるため、感情に走らず、冷静に判断して動いているようである。

これから社会へはばたこうとする学生たちであるが、4年間の学習や教科の学びと併せて、仲間作りというさらに大きな学びをする。彼女たちの“力”が合唱やグラスタなどの行事を通して、問われ、試されて、やがて実を結び、卒業していくのである。仲間作りは、今最も重視されているコミュニケーション能力の基本である。支え、支えられて作られる絆、4年間を通して、仲間と関わり、時間をかけて強い絆を作って社会へ出て行く学生たちを、初等教育学科の教員全員が、静かに見守り、喜んで送り出している。

今後も、広島文教女子大学 初等教育学科の伝統を守り、育っていくすばらしい学生たちを、支援し、送り出していきたい。

(善本桂子)